

その味

博多の屋台でおでんと焼きラーメンを食べていたら隣でよっばらいのおじさんが演劇のチラシを見ながら、この役者さん「イイ味出してるねえ」と言っている。ふと、ここで言う「イイ味」とはどういう意味なのか、携帯を取り出し調べてみると「個性的で好ましいさま」と書いてあった。僕は個性的という言葉を知るといつも頭が変な感じになる。そもそも「個性」すらちょっとどういう事か分からないのにそこに「的」がついているとなんだかすごくぼんやりとしてくるのだ。僕の心の声が聞こえたのだろうかおじさんは「個性的ってのは他とは違うって事だよ」「え？」僕は驚き「他とは違う事とイイ味出してる事がどうしてつながるのかわからないのですが…」と言うと、おじさんは牛スジを持ち上げ「味が出るって事は味が染みわたる、つまり周りに影響を与える存在という事なのさ」と教えてくれた。…そうか、ただ他と違うだけじゃダメなんだ、周りに影響を与えないと【イイ味出してる】事にはならないんだ、僕には無理だな…。とうなだれていたら「だけどな、一番旨いのはこいつなんだ」と大根をくれた。確かに大根は他から出たイイ味を全部自分のものになっている、イイ味出してる奴の隣で一番おいしいところを持って行く。「よし、僕は太根になる！」と立ち上がるとおじさんは静かに言った「あんた劇作家だろ、そういう事でいいのかい？」「…え？」「あんた本当はどっちになりたいんだ、牛スジか、太根か」…博多の屋台でこんな難問にぶつかるとは思ってもいなかった。この作品で僕が演劇をやる上での方向性が決まるかもしれない。

～公演チラシより～

登場人物 男1／幸子の夫・貴弘

男2／幸子の父

男3／晴美の彼氏・キヨシ

女1／幸子

女2／貴弘と幸子の娘・晴美

舞台には白いスクリーンの様な幕と、椅子が五脚置いてある。

役者、やってきて一礼。

男1 本日は、オイスターズ第十七回公演「その味」にご来場いただきまして、誠にありがとうございます。

開演に先立ちまして皆さまにお願いがございます。携帯電話など音の鳴るような機器をお持ちの方は何卒電源からお切りください。お願いします。最近のオイスターズはほぼ音響効果がありません。今回も途中と最後のほうにちよつとした音楽が鳴るくらいであとは無音です。マナーモードやメモールの着信音でもものすごく響いてしまいます。そうすると役者が動揺してしまいます。ちよつとした物音でも台詞が飛んでしまうギリギリの精神状態で演じておりますので、滞りなく舞台を進められますよう、協力よろしくお願いいたします。上演時間は八十分を予定しております。途中休憩はありません。非常口はあちらとあちらに二か所ございます。非常の際は係員の指示に従って落ち着いて行動してください。それでは！オイスターズ十七回公演「その味」：始めようと思っんですけど、今回の演目ちよつと何をやってるのか分かりずらいと思っておりますので、先にざつと説明しようかと思っんですけど、：まず男が居ます。この男には娘が一人居て、娘には夫が居ます。その二人の間には一人娘がおりまして、この四人の家族がどうなるかっていうか、まあそんなに期待するような展開にはならないんですけど、あ、もう一人おまして、あの人は、

男2 そんなとこまで説明するの？

男1 …あ、うん、一応、説明した方がいんじゃないかと思っ、

男2 え、どいまで喋る気？

男1 まあ、ざつと、全部？

男2 そんなお前、歌舞伎じゃないんだからさ、

男1 ん？

男2 言葉がわからん訳じゃないんだ、

男1 …でもやっぱ分かりにくいんじゃないかと思っ、

男2 全部分からそうと思っ、たつてそりゃあ無理だろ、

男1 うん、まあ、一部でも？

男2 え、一部も伝わらんと思っ、とんの？

男1 いや、それがわからないから一応説明し、とこうかなと思っ、

男2 怖がりすぎだて。

男1 うん…、

男2 俺はそんな分かりにくいとは思わん、かつたけど、

男1 あ、そう。

男2 うん。

男1 まあやる側は分かつ、とるでいいけど、初めて観る人はどうなんだろう、つていう、

男2 なに？そんなに分かつ、てもらいたいの？

男1 分かつ、てもらいたいんじゃない、かつて、楽しんでもらいたいだけなんだけど、

男2 うん。

男1 分かつ、た方が楽しめるんじゃないかと思っ、

男2 …まあ分からんで楽しいつて人も中には居るでね、

男1 ああ、

男2 だからまあそれは演出がどういう風にしたいかだからな、

男1 …え、じゃあやっぱしん方がい、いつて事？

男2 いやそれはお前がやりたいようにやつ、たらいいと思っ、つけど、

男1 でも説明しん方がい、と思っ、たんだよね？

男2 俺はだつて分かりにくいと思っ、つたし、

男1 でも初めて観る人は分かりにくいんじゃないかなあと思っ、

男2 うん、だからした方がい、と思っ、たんだろ？

男1 うん。

男2 じゃあまあいいよ、して。

男1 …なんかそんな風に言われたらしたくないんだけど、

男2 …は？
男1 そんな風に言われたら…
男2 どんな風？
男1 そういう人任せな感じが、なんか、
男2 だって俺演出じゃないし、
男1 え、演出が全部決める事なの？
男2 え、そうじゃないの？
男1 まあそうなんだけど。
男2 は？
女1 …説明したらいいんじゃないですかね？もう始まつてる訳ですし。
男1 え、他はどう思ってるの？
女1 まあどう思ってるかという、早く始めた方がいいと思ってるんですけど、もう始まつてるんで
男1 そりゃあ早く始めたいよ、その始める為の、始め方というかさ、
女1 はあ…
男1 じゃあ多数決で決めますよ、分かりにくいから説明しなくてもいいと思う人が多数派だったら
お客さんもそういう事だろうから説明するのやめますよ。
女1 ウチはわかりにくいかもしれないですけど説明しなくてもいいかもしれないですね。
男1 あそつ。
女2 わかりにくいかもしれないですけど説明しなくてもいいと思いました。前情報無しで観たいんで
男1 うん。
男3 どっちもそう大して変わらないと思いますよ。
男1 なるほどね。
男2 どつすんの？
男1 結局今どうなったの？
男2 何が？
男1 だから多数決。なんかよくわかんなくなってきたやつ。
男2 お前が質問の条件を増やしちやつたからな
男1 え？
男2 だで選択肢が増えてしまったんだがや。

男1 なんの？
男2 まあええわ。なに？そもそもどういう説明をするつもりだったの？
男1 え、どういうつて、
男2 あらすじを喋るの？
男1 いやあらすじつていうか、あらすじなんかいいもん、話がどうこうつていう話でもないし、
男2 うん。
男1 だから、「その味」つていうタイトルだからさ、これを演劇でやる訳だから、それはもう役者の個性
つていう話でしょ？
男2 うん。
男1 個性を、活かした話にしようという試みで、
男2 でもそれはテーマみたいな事なんじゃないの？
男1 テーマつていうとなんか良くわかんなくなるけど、
男2 なんだ。
男1 テーマつてよくわからんもん。
男2 でもそういう事を書くかと思つて書いたんだよね？
男1 そういう事を書くかと思つて書いたつて言つか、書いてたらそうなつたつて言つか、
男2 うん。
男1 まあいつも別に何が書きたいつて訳でもないし、
男2 え、そういう事を説明しようとしたつて事？
男1 いやそういう説明をしたつてしようがないのは分かつてるよ。
男2 あ、そうなんだ。
男1 だつてそれ話じゃないし。
男2 じゃあどういう事を説明しようとしたの？
男1 だから…、え、でもそれを説明すると説明する事になつちやうなだけいいの？
男2 うん、いいよもう。
男1 え、結局説明した方がいいつて事になつたんだつて？
男2 うんだからいいよして。
男1 …だからそういう言い方されるともうしたくないんだけど、
男2 言い方の問題なの？

だんだんと客電が落ちていく。

同時に、背景に平屋の日本家屋の影が浮かび上がる。

役者たちも各自椅子に腰を下ろす。

男2 どんな統計だて。

女1 テレビで、

男2 …似るとはとても思えん

女1 お父さんがどこを見てそう言ってるかまでは分からないですけど…、

男2 あいつのどこが良かったんだと思っ？

女1 どこがって言われるとわかんないですけど、きっとタイミングでしょうね。たまたま、あの人が近くに住んでます。出会い頭ですよ。

男2 事故みたいに言っな。

女1 事故みたいなのだと思います。夢なんかないですよ恋愛に。

男2 …それはそれで、親としてなんとも言えん気持ちになるんだけど、

女2 子としてもそうですけどね。

男2 え？

女2 出会い頭の男女の間に産まれたって思うと、なんだかなあってなります。

男2 ああ。

女2 頑張る気が失せるというか、(自分名指さし) この私は、ですけど、

女1 娘は今反抗期です。特にお父さんが嫌いみたいです。

男2 お母さんが娘の前でお父さんの悪口言っつと、お父さんの事嫌いになるんだってよ。

女1 らしいですね。

男2 分かっつるならやめた方がいいのにな奥さん。

女1 つい出ちゃうみたいなんです。本音じゃないですかね。

男2 離婚する気？

女1 考えてないと思います。でもあの人がこのまま働かなかつたら可能性はありますかね。

男2 お前がかばってやらんでどうするんだ？一緒になつて悪口言つて、じゃあなんで結婚したんだって話だろ。

女1 今さらかばうなんて無理ですよ、お父さんがかばってあげてください。

男2 俺だつて無理だわさそんなん。だつて俺はお前らの結婚反対してるでねたぶん、今になってかばうつてよつほどの心境の変化だし、それにはあいつが劇的に変わってくれんと無理だわ。

女1 まあそこは男同士、味方になつてあげてください。

男2 簡単に言いやがって…、

男1 あ、じゃあ俺、妻とお父さんが二人で話してるとその内容が気になりすぎちゃうから仕事探しに行くつていう態でその辺散歩してくる事にするんで。

女1 行つてらっしゃい。

男1 行つて来ます、つてさわやかに言いますけど、

女1 こつちだつてあの人どうせ仕事探しになんか行かないんだろうなあつて十分思つてはいるんですけどね、

男1 …そつちがそう思つてるんだらうなあつて事はこつちは全然思つてなかつただけど…、

男1、去る。

女1 男の人つて女の人の方を考へてる事一割も理解してないつてホントですか？

男2 またテレビ？

女1 誰が言つたのかもう忘れちゃつたんですけど、雑誌だつたかもしれないです。

男2 それは男が言つたか女が言つたかでも違つたらうな。

女1 イッコーだつたか尾木ママだつたか、

男2 ああ、じゃあもう分からん。

女1 私は、男の人と付き合つたつて抵抗あるのに、結婚生活なんて分からないですよ。

男2 でもお母さんとか、見てて、ある程度は知つてる訳だし、

女1 知つてはいますけど実際何考へてるのか分かりません。お茶、入れるつて事にしますか？

男2 あ、うん。

女1、キッチンらしきところに行く。

男2 そんなん言つたら俺だつて九十近いおじいちゃんが何考へてるのか分からない。

女1 九十なんですか？
男2 正確には八十五。
女1 わ、結構行ってますね。
男2 知らんかったって事に驚くわ。
女1 てことは私は…。(指折り)
男2 だいたい俺がそんな歳まで生きとるかどうかもわからない。
男3 なんにも考えてないと思いますけど。
男2 は？
男3 そこまで生きてると、だいたい考える事は一通り考えてきたと思いますから、今更考える事なんか
ないんじゃないですか？
男2 なんにも考えてない事はないだろ？
男3 いろいろスルー出来るようになるんじゃないですかね？僕のおばあちゃんも確かもう九十越えてる
んですけど、だいたいいつもニコニコしてるんですけど何考えてるかわかんないです。
男2 でもホントになんにも考えとらんかったらなんにも考えとらん人の事をなんで俺らが考えないかん
のだ。
男3 …ごめんさい、ちよつとついでいけなくなりました今。
男2 やっぱ何考えとるかわからん人の事を考えるのは難しい。
女1 じゃあやっぱり自分の思った通りにやるしかないんですかね？
男2 個人的な枠に捕らわれとったらいかんけど、
女1 …お茶、またお湯も沸いてないですけどいいですか、出しちゃって？
男2 …お湯も沸いとらんのだったらいかんのじゃないの？
女1 あ、でももう間がもたないんで。
男2 …間がもたないとか言わない方がいいんじゃないの？
女1 でもそういうこと言っちゃう人だと思っんですよね、私。
男2 じゃあ俺の戦争の時の話聞かせたろうか？
女1 え、そんな話出来るんですか？全然聞きたくないですけど。
男2 俺が入ったのは、海軍なんだわ、
女1 あ、いいですねえ海軍。海賊と戦うんですよね。
男2 そいで、魚雷に乗る訓練受けるの、回天って言うの知らん？人間魚雷

女1 ああ！知らないです。
男2 それに乗って、敵の船に突っ込むんだけど、ほとんど成功しなかったらしいんだわ。
女1 ダメじゃないですか。
男2 当時は一大プロジェクトだったんだけどね、
女1 あ、そうだーティファールでやってるって事にしたらもう湧いてるはずなんじゃないよお茶入れま
すね。
男2 何しろ操縦が難しくくてね、訓練中でも事故が多くて、それで死ぬんだわ。
女1 最悪ですね。
男2 出撃もせんうちに死ぬなんて最悪だろ。
女1 良く無事で帰って来れましたね、お父さん。
男2 俺は入隊してすぐ終戦したもんで、結局一回も乗らんかったらしい。
女1 え、何歳くらいの話ですか？
男2 十五かな、
女1 中学生ですか？
男2 うん、高校なりたて。
女1 晴美と同じじゃないですか！
男2 うん。
女1 高校生が戦争行くんですね…。
男2 まあ当時は軍国主義って言うって、ある意味洗脳状態だったからね。
女1 怖くなかったんですか？
男2 そりゃあ怖いと思うわ。回天なんかこんならしいでね、狭い、こんな体勢のまま閉じ込められて海
の中入るんだわ。
女1 凄い、調べたんですか？
男2 うん。調べたって言うわんで。
女1 お茶どうぞ、ここに置いておくことにしますね。
男2 そこね。忘れそうだね。
女1 こうやって、たまにはお父さんと話をしてみてもいいかもしれないですね…。
男2 したってよ、かわいそうに俺
女1 だってほんと嫌なんです、お父さんと話をするって事が。もう全然興味持てないんですよね、お父

さんに。

男2 …それはお前の気持ちかもしれないけど、この奥さんは、どうなの？

女1 似てると思いますけど。戦争の話とか、もう何度目なんだって話だと思いますし、ほら、近所で、犬の散歩してる人とか、飼いだに対してリードぐいぐい引つ張ったりして、それちよつと乱暴しやないかかって思う事あるじゃないですか、飼い主にしたら遠慮がなくなっていくんでしょね。

男2 …え、なんで大で例えたの？

女1 とにかく気を遣ってる余裕はないでしょうね。

女1、椅子に座る。

男2 …良かったと思う？産まれて来て。

女1 …そりゃあ、まあ、産まれて来なかつたと考えるよりは、まあいいですよ。

男2 出会い頭の事故みたいなもんでも？

女1 まあ…、はい。

男2 ならよかつた。

女1 …私はまだ、それほど悲惨な世界に生まれた事がないからかもしれないですけど…、

女2 私は別にどつちでも良かつたかもって思ってます。

女1 晴美はそうやって言いそうです。

女2 だってこのお父さんとお母さんなんてホントに事故で私産んですからね、

女1 そういう風に考察してるって事ですよ？

女2 考察っていうか絶対そうですよね？

女1 どうでしょうね。

女2 だってお父さんあんなですよ、計画性ないですよ。

女1 実際そういうのちよつと考えられないんですけど私は。

男2 お茶、ここだった？

女1 あ、たぶんそうです。

女2 その考えると、お二人にとって生まれて来ても来なくてもどつちでも良かつた訳ですから私、生まれて来ちゃつたから育ててるだけで、生まれてこなかつたら育ててないですからね、当たり前のお話ですけど。

女1 でも産まれた時は嬉しいと思つたと思いますよ。

女2 そりゃあ嬉しかつただろうなとは思いますが。赤ちゃんは可愛いですから。だからあれです、それからの育てられ方で変わつちやつたんでしょね私。

女1 何がダメだったんでしょ？

女2 それはお母さんが考えてください。

女1 お母さんだつてわかんない、お母さんになつたことないから。

女2 どうやら私はですね、家に愛着がないみたいなんです。(見直し)ここは私の家じゃない。愛着とは、愛が着くと書いて愛着ですから、愛がくつつくまで愛をくたさらないと。

女1 あげたと思えますけどそれは

女2 そちらはやつてやつたつて気がするかもしれませんが、受け取る側はちつとも感じ取つてないのが現状です。

女1 子供を育てるだけでも大変だと思えますし、それは愛情がないとやれない事だと思えますが。と私は思いますが。

女2 じゃあお父さんのせいですね。

女1 あ、うん、お父さんのせいだと思う。

男2 また始まつた…。

女1 あ、お父さんの事じゃないですか。

女2 お父さん分の愛が足りなかつたからくつつかなかつたんですね家に。あ、これは親子の事を言っているよ。実は国の事にも置き換えられますよ！家に愛着がないのに土地にある訳がないし、たまたま産まれたのがこの国だつただけで私がこの国を選んだ訳じゃないし、そう考えると死んでも守りたい場所なんてどこにもないし、愛着さえ無ければ戦争なんて起きないんじゃないかしら！あ、だからおじいちゃんの話が私にはなんにも響かない事になつてるんだ！

女1 だから娘はこの後、家を出て行くことにしたんですね。

女2 それは違います。実はお父さんが私に暴力を振るうんです、虐待が原因なんです。私はずっと理由を探してました。この家を出て行く理由を。

男1、戻つてきて突っ立っている。

女1 じゃあ私この辺で、仕事行つて来る事になってますから、行つてみます。

女2 朝早く、外はまだ暗くて、締め付けるような冷気を、身体に、感じる事にしました。お母さんは車に乗って、出かける。あの人は不倫をしているんじゃないか、と思つてみる。

女1 私はそういうの全く興味ないしこの歳でそんなの絶対面倒くさいし疲れると思われますので想像すらやめてください。

女2 そしたらお父さんと仲が悪いのも納得行くんです。

女1 仲が悪い訳じゃなくて、お父さんが卑屈になつてただけですよ、私が思うに。

女1、去る。

女2 お母さんの車が見えなくなるまで見送つて、私も家を出ました。もう二度と、この家には帰つて来ない、そう思つたと思います。ここはそもそも私の家じゃない。ここはお母さんの生まれた家で、お母さんのお父さんの家。つまりここはあのおじいちゃんの家、おじいちゃんの家私の居場所なんてある訳ないのです。私はこれから家を作りに行く、私が住む為の、家を。どこまで、独りで、

女2、去る。

それを寂しそうに見送る男2。

男1 …昨日ね、珍しくお酒を飲んだ事になつて、…まあ実際飲んだんだけど、…それでその…、まあいいやだから、本当はもう少し寝ていたいんだけどと思っただけで、ダラダラもできないって言うか、気をつかうから、で、起きて来て、お父さんのご飯を用意するんですよ、僕が。

男2 仕事は、見つからんのか？

男1 選はなきやあるんだろうけど、お父さんにはごはん(せんべいを渡す)。

男2 …おい、これは君、確かにごはんだけれどもね…

男1 晴美はパンしか食べないからパンも用意してある。(一階に声をかける風) はるみー、ご飯できたぞー、はるみー、と声を掛けても居ない。

男2 出てったからな。

男1 女の子っていつか家を出て行くとは聞いていたが、まさかこんなに早いとは。

男2 もう帰つて来んかしれんぞ。

男1 そっか。

男2 いいのか探しに行かなくて。

男1 相当嫌われてるからね、この人。

男2 暴力振るつてるんじゃないのか？

男1 だからさ、昨日たまたま仕事してた時の同僚に会つたつて事にして、おこつてくれるつて言われたと思うから飲みに行ったみたいなの。で家に帰つてきて、気の緩みかな、まあゴロンとしましたわきつと。そしたらあの女性陣、二人してグググ文句を言つたと思われる訳ですよ。働いてもいけないくせにお酒は飲むのねだとか、お酒を飲むと家の事なんにもないし、アルコールはほとんどオシッコになつて出るんだから身体を通るだけで無意味だとか、ただでさえ息が臭いのに余計臭くなるから外で寝ろだとか散々言われたと思っんですよ。だからちよつとイラッと来ちゃつて、物を投げたんだつて。物つて言つてもこんなポケットティッシュだよ、悪い切り投げてでも全然飛ばないの。それなのに晴美の方が鬼の首獲つたみたいに虐待だ暴力亭主だつて騒ぎ出してさ、それでまあこつこつという状況ですよ。やつこの作戦にまんまとはまつたという訳すな。

男2 子供の言つてる事なんだでさ、本気で拗ねてどうすんだ。

男1 …

男2 行けよ、探しに。

男1 晴美の行きそうなところなんて見当もつかないもん。

男2 反抗期つてはつたらかすのが一番いかんらしいぞ。

男1 近寄ると余計嫌われるもん。

男2 …もつと仲良くできんもんか、家族なんだから。

「チーン」とお鈴が鳴る。

男1 実際はそんな言葉聞いてないからこんな風にお父さんと話す事なんてありえないんだけどね。

男2 俺が八十五じゃなかったら引つ叩いて気合の一つも入れてやるところだがいかんせん足腰がもつかん。このお父さんはな、お前の事をちゃんと実の息子だと思つとるらしいぞ。

男1 …そおだったんだ、でもそれをどうやったら感じとれるんだろ。

男2 まあな、実際はこんなに喋らんし、動けんし。

男1 俺の気持ちもわかつてやつてよ。だって他人の家でさ、嫁は朝早く出て行って夜遅くまで帰つて来ないし、娘は家出をしたので帰つて来ないし、俺は仕事がないから出かける必要もないんだけど家に居

ると息が詰まるから仕事探しに行くふりをして外に出ると雨。雨の日以外はたいてい公園に行ったり、ブラブラしたりして時間をつぶして帰ってくる。だから正直、晴美が出て行った事よりもお父さんと二人きりの時間が増えるっていうのが嫌だと思っただ。

男2 それは俺にも晴美にもひどいな。

男1 ひどいと思っただけど、晴美は心配ないって言うのがどっかであって、だから今一番心配なのは俺なんですよ。

男2 晴美は、また高校生だろう。

男1 高校一年。

男2 しつかりしなさいよ。

男1 でもね、やっぱり社会的弱者は確実に俺だと思ってるらしいから俺、もっと俺の事こそを心配してくれよと、娘の事よりもなによりも自分の事なんだ、自分の事でいっぱいみたいなんだ俺

間。

男2 …俺さ、

男1 うん。

男2 最近こほんの味がしんみたいなんだわ。

男1 どついうこと？

男2 どついうことって、そのまんまだよ。

男1 味覚障害ってこと？

男2 かな。

男1 あ、そう…。でもいいんじゃない？どうせそんなに食べんでしょ？

男2 え、そういう問題？

男1 だってそんなに食べないでしょおいちゃんて。

男2 いや俺ね、どうやら食べたものがあるみたいなんだよね。

男1 あ、そうなの？なに？

男2 それが思い出せないみたいなんだよね。

男1 …は？

男2 だから何を食べても、なんか違うなあって思ってるの。

男1 …はあ。

男2 まあわからないでもないなあとは思って、なんか食べたいんだけど、何が食べたいかわかんない時あるじゃん。そういう時に上手くはまると「ああ！これが食べたかったんだ」ってなることあるもんね？

男1 あ、そう。

男2 え、無い？

男1 無い。

男2 え？

男1 自分で自分で食べたいものがわからないの？

男2 そんな俺に言われても…

男1 え、なんで？どういう事？だつてうなぎ食べたいなあと思つてうなぎ食べに行くんじゃないの普通？

男2 でもそれが何がわからん時つてあるじゃん。なんか食べたいんだけど…なんかなあ、つていうさ、

男1 食わんときやいいじゃん。

男2 でも腹は減つてるんだよ？

男1 そういう時はなんでもいいんじゃないの？

男2 なんでもいい訳じゃないだつて、

男1 なんで？

男2 なんで？

男1 あるもの食つとけばいいんだつてそういう時は。

男2 でも食べた後それで満足しないからモヤモヤするんじゃない？

男1 なにそれ。

男2 あー、こんなので腹膨らせてまったつて後悔する事あるでしょ？

男1 美味しいもの食つちやつた時はね。

男2 おいしいものでもそうなつちやうんだつて。

男1 なんちゆう贅沢な悩みだ。

男2 贅沢かどうか知らんけど、とにかく俺は今そういう状態らしいんだわ。

男1 なにそれ…

男2 俺だつてわかんないもんそんなの、

男1 食えるだけありがたいと思え、馬鹿者。

男2 おい、お年寄りだぞ俺は。もつと敬え。

男1 少ない食費でやりくりしてんだこつちは。なのに毎月減らされて。もう飢え死にしろ、警沢老人が。

男2 はあー…つくづく、なんでこんな男と結婚したんだよあいつは。

男1 俺だってそう思うわ。これで幸子まで帰って来んかったらさ、家に、おっさんが一人だぞ？血のつながらない、正確にはおじさんとおじいさん。二人はともに寝起きをされていて、おじさんがおじいさんに「ご飯を作ってあげている。そりゃあ味気なくなるわ！」

男2 …いかん、泣けてきた。

女1、戻ってくる。

男1 そして嫁が帰って来ると、また別のプレッシャーを感じるんだけどね…

女1 私は今、ひどく疲れているんですね。

男1 あ、うん。

女1 (時計のあるらしき場所を見て) 夜一〇時を過ぎてるんです。

男1 ああ。

女1 家に帰ると、夫というおじさんがソファーに座ってくつろいでいる。

男1 すいませんね。

女1 確かにイラッとしますね。

男1 うん、そういうイラッと感を敏感に感じますからね僕は、だから「おはん作つてあるよ。あ、先にお風呂溜めようか？」って聞きますよ。

女1 そういう態度にまたイラッと来ませんか？

男1 ああじゃあもつとついたらいいのかわからないから勝手にしろよって普通はなるんでしようけど俺は「ここで踏ん張る人なの。」

女1 えっと、そうなるかどうかしらいいんでしよう？イライラが止まらない。

男1 それは本当に申し訳ないと思ってるけど「これ実際の会話はどうなってるかという」と「おかえり」

女1 …。

男1 「ご飯作つてあるよ。あ、先にお風呂溜めようか？」

女1 …。

男1 とまあ基本無視だからね。

女1 ええ、なのでうるさいので第一声として適切なのは「仕事は？」

男1 …。

女1 と言つと黙るんです。

男1 そうなんだよね…。

女1 鞆を置いて、上着を脱いで、タオルを持って、

男1 いや今日も行ったんだけど「ハローワーク、もう凄い人で、車も渋滞してるの。表までずらつと並んで。車持ってるんだから働く必要ないだろうって思うんだ。車持ってる人は後回しにしてほしいよ。車も維持できないくらい困ってる人がいるんだからさここに。」

女1 不思議ですーウソだと言つ事がすぐにわかるようになって来ました私にも！

男1 そりゃそうだよだつて嘘だもん！本当は「階ですつとキューキュー見たと思つたよ、なんか都市伝説についてのいろいろ。そつた、今日は雨が降つてたらしいから。」

女1 ああ、だから必死で家の事をやってるアピールしてるんですね？

男1 うんそうー家の事をやってるからあなたも仕事しなくてもいいんじゃない、専業主夫になったら？って言われるような男になりたいと思つて頑張ってるらしい！

女1 そういう魂胆が丸見えだとやっぱ無視が正解ですよ？

男1 そりゃあそうですよね。

男2 二人とも、夫婦喧嘩もいけどちよつとは娘の心配もしてやれよ。

女1 夫婦喧嘩なんかしてないですよ、だつて私ずつと無視してますから。

男2 もう二週間近く経つんじゃないのか。

男1 それはさすがに心配する。

女1 彼氏のとこに居るんですつて。

男1 え、なんで知ってるの？

女1 電話がかかって来たので。

男1 え、いつ？

女1 二週間前。

男1 それ出つた直後じゃん。…なんだ、連絡あつたんだ。

女1 じゃないともつと慌てると思います。

男2 そつか。

男1 しかし高校生の娘を二週間も泊めるような男ってどういう男だ。どういう男なんだ？

女1 そこまで詳しく聞いてないと思います、詮索されるの嫌がるから。

男1 独り暮らしなんだろうな。経済的にも余裕はあるだろう。てことは社会人かな。まあろくでもない男じゃなければいいんだが、と俺が言うとお前が言うなという目を向けられるのは分かってるから言わないけどね。

女1 どこまでついて来る気ですか？私今からシャワー浴びる事になるんで。

男1 …(男2を手招きして)。

男2 ん？

男1 (女1に) ねえ、お父さんの事どう思ってる？娘として。

女1 どうって？

男2 いいてそんな聞かんで、

男1 いや、どう思ってるのかわかって思っ

女1 どうも思ってますんけど？

男2 …

男1 あのさ、お父さん最近なんかちよつと食欲ないみたいでさ、病院連れてった方がいいんじゃないかと思っただけど。

男2 食欲が無い訳じゃないんだわ…

男2、せんべいの袋を開け、

女1 寒くなって来ましたからね、

男1 気温関係ある？

女1 ありますよそりゃあ。

男1 でもそういう事でもないみたいでさ、なんか食べた方がいいものがあるみたいなんだけど、それが何か判らないみたいなんだよね。

男2 もついいって。

女1 かりんとう食べさせました？

男1 かりんとう？

女1 お父さんはかりんとうが大好きなようだから。

男1 かりんとうなんか食べられないよそんな堅いもの。

男2、食べる。

男1 本当だったら。

女1 精神的な事です、ほっとけば忘れれますよ。

男1 そうかもしれないけど…

女1 すいませんけど、もう話しかけないでもらえますか？今シャワー浴びてるんで。

男1 …君もシャワー浴びてるならシャワー浴びてるっぽくしたらいいじゃないか。

女1 なんでシャワーもないのにシャワー浴びてるっぽくしないといけないんですか恥ずかしいわ。

男1 もうちよつと考えてもいいんじゃないかと思っ。俺だつてさ、本当はお父さんの事考える余裕もないだろうし実際これっぽっちも考えてはいないと思っただけど、寝たきりとかになったら誰が介護するのかとか心配になつちゃうしさ、このまま行くと俺になつちゃうじゃん…

女1 働かないんだつたらそうなるでしょうね。

男1 絶対ヤダよ。

女1 でも誰かが面倒見ないとしょうがないじゃないですか。

男1 うんだから聞いているんじゃないか、お父さんの事どう思ってるのかわって、

女1 だから、どうも思ってないです。

男1 …どうどうめぐり

男2 俺ね、

男1 ん？

男2 相当傷付いてるからね。

男1 そうか。

男2 なんでわざわざ呼んだんだ、可哀そうに。

男1 まあそうだろうね。でも絶対ヤダよ、なんで自分の親でもない人の介護をしないかんだ。

男2 俺だつてお前に介護されたないわ！

男2、歩く。

男1 なんかさ、デイサービスの人とか頼んだ方がいいかもしれない、そしたら俺も気にせず仕事探しに行けるし。

女1 そんなお金どこにあるの？

男1 あ、じゃあさ、デイサービスの人雇った事にして俺にお金ちょうだい。そしたら俺家の事マジで頑張る。

女1、男1を見る。

男1 それは冗談として…、ほら見て、最近なんか一人にしておくとおあやつてふらつとどっか行っちゃ

うんだようそれが一番心配なんだけよ。

女1 あなだずつと家に居るんですよね？

男1 居る事は居るけど、俺だつて仕事探しに行かないといけないんだしよ。

女1 お父さん連れてつたらしいじゃないですか。

男1 お父さんと仕事探しに行くの？それはちよつと無理があると思うんだけど…。

男2 もの俺の事は聞いてほつといて。

男1 そういふ訳にはいかんよ…。

男2 いやもうさ、モヤモヤするんだよ。そういうモヤモヤがたまつてよおわからんくなって来つと思

うんざり。

男1 靴脱げた。いや脱いだのか？

男2 そういう原因のわからんモヤモヤが…、ふあーあ。

男1 おい欠伸すんな。

男2 まあとにかくだね、これからそういう感じになってきちゃうと思つから、あんまり話掛けられても

ちやんと返事出来んと思つてさ俺も。

男1 なんですよ？

男2 ひとつの事しか考えられんようになってきてるんだわ俺。

男1 は？

男2 だからなんていうんだろうね、今がいつとか、なにがこうだからこうなつてるとか、筋道がさ俺の中にはあるんだけどね、それがすこい短いスパンで切り替わつていくからさ、目に入ったものから連想されたり、まあ思考回路はちゃんとしてるんだよ、とは思つんだけど、それが全体として見えてない

というか、覚えていられないというか、

男1 …何言つてんのさつきから？

男2 一生懸命説明するところいふ感じ。

男1 何を？

男2 豊田君ね。

男1 豊田君じゃないです。豊田君て誰？

男2 ン、君は、誰？

男1 …え？

男2 …は？

男1 …タカヒロです。

男2 タカヒロ？

男1 貴弘です、幸子の夫やつてます。

男2 ああ、幸子の。

男1 …はい。

男2 いや、幸子はね、そうそう、病弱な子でね、一歳半くらいの時だったかな、重度の肺炎にかかつてね、最初は小児喘息だつて言われてたんだけどね、レントゲン撮つてみると真っ白でね、

男1 …は？

男2 手術はできないから薬でなんとかするしかなくてね、それも効果があるのかわからないというありさまだったんだよ。

男1 …ねえ、靴履こうかとりあえず。

男2 私達も覚悟を決めていたんだ、しかし一週間も経つとウソのようにケロッとなつてね、

男1 お父さん…？

男2 あの子は強い子だ、本当に。

男1 え…。

男2 豊田君と言つたかな。

男1 貴弘です…。

男2 どうぞ、あの子をよろしく願ひしますね。

男1 …お父さん、僕ら結婚してたいぶ経ちます。確かにちよつと最近危ないですけど、大丈夫ですから。

男2 娘は、いつまで経つても娘だからね。

男1 お父さんが急にボケちゃったみたい…。
女1 演技してただけですよ。
男1 そりゃそうなんだろうけどちつとも上手くない。
男2 私はね、昔から好き嫌いがなくてね。なかでも好きなのが、あの、なんて言ったっけ、あの、赤い、
ちつとした、あの、
男1 いくら？
男2 そう、いちご。
男1 …ああ。
男2 いちごが好きでね。
男1 そうなんだ…。
男2 うん、いちごはね、本当に好き。
男1 可愛いとおじいちちゃんだな。
男2 うん、いちごはね、大好きですね。はいこんにちは。
男3 いらっしやーい！僕はここのラーメン屋さんでバイトしてますキヨシって言います。
男1 えーラーメン食べるんですか？
男2 うん。
男1 なんていきなりラーメン？いちごは？
男2 えーっと、今日は、何にしようかなあ、
男1 …ここ、良く来るんですか？
男3 ええ、週四来ますね。
男1 そんなに？！
男3 僕は。
男1 …。
男2 よし、そうしよう！もやしラーメンの大
男3 はい。
男2 あと、
男1 え？
男2 味噌ラーメン。
男1 お父さん？

男2 の大。
男1 いや絶対そんなに食べられないでしょ。
男2 あとは…
男1 お父さんは、いつもごはん茶碗半分も食べられないからさ、
男2 よし決まった、冷やし中華の並。
男1 ねえお父さん、絶対無理だから、どれか一つにしよう、ね？
男2 以上で。
男3 もやしラーメンの大一つと、味噌ラーメンの大一つ、冷やし中華の並ひとつですね。
男2 はい。
男1 あの、小さいサイズとかできないですか？
男3 うちそういうのやってなんで。
男1 そこをなんとかなりませんか？その人ちよつとアレなんで…
男3 大丈夫ですよ、ウチの大盛りは他の店の普通サイズなんで。
男1 なにそれ。
男3 サービスでもやし多めでもできますけど？
男1 ねえ見たらわかるじゃないですか、じじいが一人で麺類二つも食べる訳ないでしょう。
男2 じゃあもやし抜きで。
男3 はい。
男1 だったらもやしラーメンじゃなくてもいいですよ？
男2 さてと、ここだとイイんだがなあ…
男1 え、なに？一人で出掛けているのはこうやって食べ歩きしてんの？
男2 私ももういい歳だからね、いつ死んでもおかしくない年齢だから、食べられるうちに食べたい物を
食べておきたいと思ってるね、
男1 それがこのラーメンなの？
男2 どうだろうなあ、ここかもしれないが、ここじゃないのかなあ…。あの時食べた、あれをもう一度
食べたいんだがね、
男1 (女1に) こんな感じなんだ。
女1 はいはい。
男2 なにしる美味しかったなあという記憶だけはあるんだよね、それが全く思い出せなくてね。いつど

ここで食べたどんな食べ物だったやら…、あーモヤモヤするよ。

男3 どういう味だったのかも覚えてないです？

男2 うーん

男3 甘いとが、

男2 うーん

男3 辛いとか、

男2 甘かったような、甘辛かったような

男1 甘い物が好きなんだな…。

男3 味の記憶つてさ、食べた時の場所なんかでも変わる事ありますよね？旅先で食べたものが、家に買って帰るとそれほどおいしく感じないって事よくあるでしょ？おじいちゃんの場合ももしかしたらそれかも知らないなあ。

男2 ああ…。

男3 だとするとおいしい物はかりを探すより、当たり前にあるものの中にも、その味はあるんじゃないのかな。

男2 なるほどね…。

男3 もしかしたら、その味というのは、ただの味覚の事だけじゃなくて、失われてしまった何かの事かもしれないですしね。

男2 …あんた、何者だい？

男3 まあ、いいじゃないですかそれは。

男2 失われてしまった何か…か。

男2、うなだれて歩き出す。

男3 二三〇円です。

男1 お父さんお金持ってたんだ？

男2 うん、家の財布から抜いてるからねちよくちよく。

男1 だから少なくなってるのか！

女1 それホントの話です？

男1 ホントだつて、今聞いてたでしょ？

女1 あなたがバチンコでも行つたんじゃないのかと思つてますけど私？

男1 俺バチンコやらないって

男3 ホントですよ。

女1 あら、そう。

男3 はい。おじいちゃんのくせによく食べるなあと思つたんで。

男1 ほらあ。

女1 でもそれはあなたの管理が甘いつて事だと思つんですが。

男1 そんな風に責められたら俺はいよいよ気が抜けなくなっちゃうよ…。

男2、しばらく歩いてしたが、いつの間にか居なくなる。

男1 君はなんでここにいるの？

男3 お帰りなさい。

男1 …は？

女1 晴美の彼氏なんですって。

男1 …え？

男3 キヨシつて言います。よろしくお願ひ。

男1 …は？

男3 …。

男1 …え？

男3 なにか？

男1 え、晴美は？

男3 晴美はもうすぐ現れますよ。今うんちしてるんで。

男1 …そんな事言わなくていいよいちいち。

女2、やってくるけどすぐ去る。

男3 はは、なんででしょうね？なんで恥ずかしいんですかね？生きとし生けるものは全て皆うんちするんですけどね、はは。

男1 …え、キヨシ君で言ったっけ？

男3 あ、僕ですか？

男1 当たり前じゃん。

男3 はい。

男1 え、キヨシ君は、ラーメン屋でバイトしてるの？

男3 はい。

男1 フリーター？

男3 違います。

男1 じゃあなに？

男3 大学生です。

男1 大学生？！

男3 はい。

男1 え、どこの馬鹿な大学通ってるの？言わなくていいけど。

男3 僕。

男1 うん。

男3 法律を勉強していて、

男1 え、そうなの？

男3 弁護士になった兄がいるんですけど、

男1 …ああ、うん。

男3 その兄が今度政治家になるらしくて、

男1 え？！

男3 手始めに地方のローカル番組とかでプチ法律相談みたいなコーナーに出演したいと言ってるんです。

男1 …うん。

男3 そこからブレイクして全国ネットの番組に出れるようになれば、簡単に市長にくらいはなれるんじゃないかと目論んでるんですけど、

男1 …うん。

男3 世の中なめんじゃねえぞって言うてやっつと思っんです。

男1 …あ、うん。

男3 もしそういう兄が居たら。

男1 …は？

男3 テレビ見てて簡単そつだと思ったら大間違いですから。

男1 …。

男3 そういう妄想はかりしてるんです僕、どう思います？

男1 …君は、大学で何をやってるの？

男3 そうそう、妹が居るんですけど、

男1 それも妄想の話かい？

男3 はい。

男1 妄想の話はいいんだ、じゃなくて君の…(女1に)え、こういう人が娘の彼氏って、それはいいの？

女1 こういう事って、親にどうこう言われると余計反発すると思っんですよね私。

男1 いや、でも…晴美ちよつと来なさい。

女2、顔は見せず。

女2 ヤダ。

男1 …ちよつと、話があるんだ。

女2 ヤダ。

男1 …こんな男はやめといた方がいいと思っけど、君自身はどう思ってるんだ。

女2 キヨシ君はまっすぐで誠実な人だと思います。

男1 どこがだ？…こいつさつきから適当にしか喋ってないぞ。

男3 僕は全部正直に喋ってるんですけどね。

女2 キヨシ君と喋ってる時、私はとても楽に話ができ、それはキヨシ君になんの企みもないからだと思います。

男1 君、結構行ってるっぽいけど、今幾つ？

男3 二十五という設定です。

男1 晴美は十五だぞ！

男3 はい。

男1 …は？

男3 何か？

男1 …え、何年生？

男3 僕ですか？

男1 他に誰に聞くんだったこの流れで。

男3 三年です。

男1 二十五にもなつて大学三年か！

男3 はい。

男1 え、留年してるの？

男3 違いますよ。

男1 じゃあ浪人？

男3 違います。

男1 …じゃあなに？

男3 二十三歳で大学入ったんです。

男1 …じゃあそれまでは何をやってたの？

男3 それまでは生きてました。

男1 晴美…。

男3 毎日、ああ生きてるなああつて思つてました。毎日、僕は生きてるなああつて…。でも生きてるなああつて思わない時もあるんです。でも、あの時は、すごい生きてるなああつて感じて、その時に思つたんですね、あ、大学行こうつて。

男1 …は？

男3 はい。

男1 …君達は、晴美と君は、どんな出会いをしたんだ？

男3 出会いですか？

男1 ちよつと考えてみて、

女2 あなたは誰？

男3 僕は、キヨシ。

女2 ああ、キヨシ。

男3 きよしこの夜のキヨシ。

女2 ああ、清々しいのキヨシじゃなくて、聖蘭士星矢のキヨシだ。

男3 そう、え、聖蘭士星矢にキヨシなんて出てた？

女2 ううん、聖蘭士星矢にキヨシなんて出てない。

男3 じゃあどこに出てた？

女2 最近観ないね。

男3 うん、たけしは観るけど、

女2 うん、たけしは観る。

男3 え、どこで？

女2 テレビで。

男3 なんチャン？

女2 変なイントネーション。

男3 なんチャン？？

女2 ナンチャンでしょ？

男3 ナンチャン？

女2 うん。ヒルナンデスに出てるのは。

男3 うん、ナンチャンは出てる。

女2 ウツチャンは？

男3 ウツチャンは出てない。

女2 そう。

男3 よつちゃんは？

女2 よつちゃんて誰？

男3 野村義男。

女2 誰？

男3 たのきんトリオ。

女2 誰？

男3 俊ちゃん、マッチ、よつちゃん。

女2 誰？

男3 空が青いね。

女2 青い！こんなに青かったんだ！空！

男3 空の色は太陽の光が大気中の粒子に反射して青くなり赤くなる光の色！そう、僕らは今光の中に居るんだ！

女2 それからキヨシ君のところに世話になってる。

男1 なに言ってるんだこいつ。

女1 たのきんトリオ知ってるんですか？

男3 はい、僕、たのきんトリオ知ってます。

女1 私が小学生の頃一番人気あったんですけど、たのきんトリオ、

男3 奥さん今いくつ？

男1 君、人の奥さんに向かってなんだその、バカ。

女1 もう四十ちよいなんです…。

男3 見た目若いですね。

女1 そりゃあそうだと思います。

女2 電話 鳴ってる。

女1 出て。

女2 はい、もしもし。はい、家の者に代わります。

女1 誰？

女2、出て来て、

女2 警察。

男1 え？！

女2 おじいちゃん、警察に捕まったって。

男2、歩いて来て、

男2 誰だ、俺の財布からお金を盗んでいった奴は。

男1、頭を抱える。

男2 ちゃんと持ったはずなのに支払いの段になると無いぞ。誰だ、泥棒は？泥棒が居るぞ、この家に。

男1 元はあんたが泥棒なんだよ？

男2 ふんだり蹴つたりだな全く。俺は飯を食っただけなのに、なんで捕まらんといかん？まーかんわホント、どこの泥棒。泥棒こそ捕まらる。

女1 どうして目離すんですか？

男1 だから俺は監視員じゃないんだからさ、じゃあ監視員と同じくらい給料頂戴！

女2 何食べたのおじいちゃん？

男2 ん？なんかよおわからん、なんかフレンチだわ。

女2 わお。

男2 駅ビルの中に入ってる、なんかこじやれた店だわ、

男3 駅ビルの中にあるお店はどれも高いんだぜ。

女2 幾らだったの？

男2 五万ちよつとだろうな、

女2 え？！

男1 十万越えてるんだよ。

女2 え？！

男3 いいなあ。

男1 一人で十万越えてるってどういう…

男2 フルコースって奴をね、食べてみたんだがね、

男1 ワインも頼んだら。

男2 うん。

男3 いいなあ

男1 飲めないくせに。

男2 いや、もしかしたらと思ったんだがね。

男1 だって食べた事ないんでしょフランス料理なんて？

男2 うん。

男1 じゃあもしかしたら何もないだろ…。

男2 失われた記憶の中にね、あるかもしれないと、思ったんだがね。

男1 …君が余計な事言うから。

男3 いや可能性はありますよ。遠い記憶の中にフランス料理を食べていたかもしれない。

男2 しかしフランス料理ってのはなんであんな高いんだ？なんだかどれ食ってもなんの味かわからんかったし、なんであんな物がそんなする？まったく腹立たしいったらありやせんわ！あー、モヤモヤするよねえ。

男1 ほら見て、妻は目を合わせてくれない。あれは相当怒ってるサインなんだ。

女1 私はこのとき呆れて口が利けないでいるんです。すべて夫のせいだと思っっていますからね。

男1 どうして俺のせいにされてるのかわからない。

女1 ただでさえ家計が苦しいというのに男どもはどうしてこうも自分勝手なのでしょう？

男1 一緒にしないでくれるかな？

女1 どうして私だけがこんなに働かないといけないのか…、家に帰ると何もせずゴロゴロしている男がいて…、どうしてこんな何もしていない男に栄養を与える為に私は働かないといけないのか…、私だって働きたくない…、外で仕事しないならせめてお父さんの面倒くらいみなさいよ！と言いたくて仕方がないんです私は。

男2 いや皆さんのお怒りは判りますよ。だって私だってそうなんです。そんなに高い金を払ったのに美味しくない料理を食わされてさ、フランス人はなんであんなものが好きなんだ？トリュフ？フォアグラ？キャビア？何が三天珍味だ！バカ！

拳を握る女1。

男1 …お父さん、それ以上火に油を注ぐような事言わないで、すべての火の粉が僕に飛んでくるんだ。

男2 私はね、思い返すと洋食というのが好かんのですよ。日本人なら和食を食べなさいよ和食を！こはんおみそ汁卵焼き、それで充分なんです私は。

男1 じゃあなんでフレンチ食べたんですか？言ってる事とやってる事めちやくちやじゃないかあんだ！

男2 豊田君ね、それがわかっただけでも良かったと思っっておりますよ私は。

男1 そんなものの為に十方は高すぎるんだよ…。豊田君で誰だ！

男2 おかしいなあ、私は食べたい物を食べただけなんだけどね。

男1 もつこれからはバッチつけますからね、住所と電話番号書いたやつ。

男2 だってあれなんですよ、あの、ほら、この味なんですよ、(舌)にあるんですよ、あの味が、

ずつと離れんのですよ…。

男1 それが何かわかんないんですよ？

男2 うん…。

男1 どんな味だったのかも。

男2 甘かったような、甘辛かったような…。

男1 しょっぱいものじゃない事はわかったよ。でもそれだけの情報じゃあ探しようがないだろ。あんたの食へて来たものを、ずつとさかのぼって探す気？今まで何食食べて来たんだよ、もう八十五だろ？

男2 戦時中は辛ばつか食ってたと思っから候補から外していいよ…。

男1 …おい、本気でさかのぼる気？

男2 だってここにあるんだもん、あるんだもの…。

男1 無いんだよそんなものは、ある気がするだけだって、

男2 なんだったかなあ…。

男3 さて、そろそろいいですか？

女2 あ、ごめん、帰ろうか。

女1 もう帰るの？

女2 荷物取りに来ただけだから。

男3 そろそろ、僕がたくさん喋りますから。皆さん休んでいいですよ。

男1 …は？

男3 さあ奥さん、買い物行って来てくださいよ。おじいちゃんの探してる味は、おじいちゃん自身がちやあんとわかってますから。

女2 え？

男1 え？

男2 え？！

男3 だってさつき自分で言ったじゃないですか、(飯とお味噌汁と卵焼き)だって。

男2 …え？…え？…え？

男1 (飯とおみそ汁と卵焼き)なんてよく出してるけど…。

男3 そりゃああんた、なんでもいって訳じゃないさ。そんなとこの馬の骨かわからないぼつと出の娘の旦那の手料理なんぞ、思い出の味な訳なからうが。

男2 そうか、そうかもしれない…、うん、私が今自分で言ったもんね。うんそうかもしれない！

男3 ほら奥さん、あんたの出番だよ。

女1 …。

男3 あんたにしか、出来ない事だと思っぜ、

男1 …あいにくだけど、幸子は料理しないんだよ。

男3 僕は奥さんに聞いてるんです。

男1 なんだ君は偉そうに…、

女1 私は、料理をしたくないだけで本当は出来ます。出来ないと思われると癪に障ります。

男1 幸子？

女1 お父さんの食べたいもの、私本当は判ってたんですよ。それは、お母さんの味だから。

女1、去る。

男1 幸子、前はよく作ってたんです、お察しの通り僕が働いていた頃はだけど。

男1も去る。

女2 お母さんのお母さん、はおばあちゃん。おばあちゃんの味は、おじいちゃんの奥さんの味。

男3 おばあちゃんはどうなんだったんだい？

女2 おばあちゃんは大好き。それはよくお小遣いくれたからだと思う。

男3 おじいちゃんはくれないの？

女2 うん、おじいちゃんはくれない。だから好きじゃない。

男3 じゃあ晴美はお金をくれる人が好きなんだな。

女2 うん、そうだ。

男3 それは人じゃなくてお金が好きなんじゃないのかい？

女2 そうかもしれない！だから人があんまり好きじゃないんだ、つながつた。

男3 でもね、本当はお金よりも人の方が価値があるんだぜ。

女2 嘘つけ。

男3 なにせお金は使ったらなくなるけど、人は、使ってもなくならないからな。

女2 マジで？

男3 もちろんみんながみんなじゃないけど、そういう人も居る。

女2 どこに？

男3 それを、みんな探してるんだ。

女2 キヨシ君は見つけたの？

男3 僕はね、使うより使われる人になりたいから探してない。

女2 使ってもなくならないの？

男3 ああ、僕は誰に使われてもなくならない、そういう人になりたい。

女2 じゃあキヨシ君を使って百万手に入りたいです。

男3 今はまだ、それほど価値はないけれど、そのうちもつと価値が出るよ僕は。

女2 早くしろよな。

男3 おじいちゃんにとっておばあちゃんも、すごく価値がある人だったんだ。高級フレンチレストラン

なんかくらべものにならないくらいね。

女2 なるほどね。

男3 もう食べられないとなればなおさら価値は上がるだろう。

女2 おばあちゃんが亡くなったのは私が小学校卒業の時だから、もう二年は経ちます。

男2 そうか、もう、そんなに経つのか…。

女2 おばあちゃんが病気になるって、おじいちゃん一人だと大変だろうから私たちがこの家に越して来た

って設定なのよ。

男3 なるほど、そういう設定だったんだ。

女1、出て来て。

女1 あれからご飯を炊いて、お味噌汁を作ってたってやったらこんな早くは絶対に出来ないんだけど、もう出来たつていう事にして持ってきてもいいかしらお父さん？

男2 いいよ。どうせ実物が無いなら時間を掛けるだけ無駄だからね。

「ほか、ほか」という文字が浮かび上がり、男1がやってくる。

男1 ほら、お父さん見て、ほかほかのご飯と、ほかほかのお味噌汁と、ほかほかの卵焼きだよ。幸子が、幸子を作ったんだ。お母さんの味を一番知ってる幸子がね、作ったんだ。

男2 …これが、そうか。

女1 お味噌汁は赤みそで、具は大根とお揚げさん。卵焼きは甘い。お母さんが良く作ってくれた。

男2 なんだか、申し訳ないね…。

女1 大根はちゃんと太目の千切りにしましたよ。

男2 …うん、うん。

男1 …さあ、食べ。

男2 …いただきます。

男1 どう？

男2 早い、まだ食つとらん。

男1 そう。

皆 見守っている。

男2、涙ぐむ。

男2 …うん。…これだ、この味だ。

微笑む女1。涙ぐむ男1。にこやかな女2と男3。

男2 これでもう、なんにも、思い残すことはない。…母さんが逝って、あれからずっと、この味を探して
たんだなあ…。

男2、静かに目をつむる。

男1 お父さん？…*(女1も) おとーさん！

*女2と男3 おじーちゃん！

「チーン」

男1 …そうして、お父さんが亡くなったのが、八十五だから、大往生だよ。

女1 これであなただも、心置きなく仕事探しに行けますね。

男1 …まあ、そういう事になりますね。

女1 晴美は、これからどうすると思います？

女2 家に帰ると思います。

男1 でもそれは晴美の家じゃないだろ？キヨシ君の家だろ？

女2 そう。

男1 だったら晴美の家はここじゃないの？

女2 私に帰る家はないですよ。今はまだ、この地球上のどこにも。

男1 …なんでそこまで家に絶望してるの？その世界観はどこから来るの？

女2 なんででしょう？

男1 ちよつと考えてみて。

女2 ヤです。

男1 そうか。てことは、これからは幸子と二人暮らしか…。

女1 …。

男1 …ちよつとなんとかならないかな？キヨシ君だって迷惑じゃないの？

男3 大丈夫ですよ。

男1 あそう。

女2 私も一緒にバイトしてるんで、ラーメン屋。

男1 あのラーメン屋はやめた方がいいんじゃない？

女2 時給高いんですよ。

男1 嘘つけ。

女2 千二百円。

男1 俺も雇ってくれないかな？

女2 ダメ、シフト削られるから。

男1 そうか。

女2 ここは私の家にしては広すぎますね。

男1 俺たち二人でも広すぎるよ。

男3 僕ね、実家が富山なんですけど、小さい頃、両親が離婚して、父親に育てられて来たんですけど、新しいお母さんが来て、そのお母さんの実家に暮らす事になったんですね。お父さんと新しいお母さんは毎日喧嘩してて、お母さんのお父さんとお母さんはお父さんを目の敵にするからお父さんはある目を

境に帰って来なくなつて、僕は他人の家で他人としばらく暮らす事になったんです。高校の卒業式の日、新しいお母さんに言われました。これからは一人で生きていくようにつて。それは当然ですよね、だって他人なんですから。新しいお母さんには僕を高校まで通わせてくれてとても感謝します。それから僕はこっちに来て、一人で生きてきました。

男1 ……。

男3 だから、晴美は家に帰った方がいいと思う。家族は捨てるのも捨てられるのも、どっちも寂しいよ。

男1 ……そういう事だったのか、じゃあ大学も自分で稼いで通つてゐるんだ。偉いな…。さつきから失礼な事を言つてすいませんでした（頭を下げる）。

男3 いえ、僕がそういう境遇だったらと思つて話しただけです。

男1 ……。

男3 もしそんな境遇だったら、寂しいですよ。

男1 ……そういう事だったのか。頭を下げた俺の気持ちには、どうしてくれるんだ。

男3 （女2に）晴美さんにはこんな気持ち、耐えられないと思うよ？

女2 はあ。

男3 わかんないか。

女2 わかんない。

男3 そっか。

女2 本当にそうだった時考えます。

男3 そっだね、妄想で無駄に寂しくなる必要はないのかもしれない。

女2 可能性を探るのも考え物ですよキヨシ君。

男3 いや、可能性を探るからこそその時の気持ちの浮き沈みを最小限に抑えることができるんだよ。

女2 めんどくせ。

男3 めんどくさいね、僕もそう思った。

男2 ちよつといいかな。

男1 ……はい？

男2 ……やっぱりね、違つみたいなんだ。

他 ……。

男2 ……ごめんね。

男1 ……じゃあなんであんな紛らわしい事したの？

男3 ずっとここに居たら妙な感じはしてました。

女2 これは幽霊なのかと、私にしか見えていないのかと。

男2 幽霊だと思われのが一番嫌だった。

女1 お母さんの味じゃなかったんですか？

男2 ……いや、お母さんの味、そつくりだったよ、と思うよ。それはそれは懐かしい気持ちになつたとも

思う。だけどね…。そもそも、そんなにお母さんの味に思い出があつた訳じゃないと思うんだ…。だつてそんなに込み上げて来なかつたし。

男1 込み上げて来ないから設定が違うんじゃないかと、そういう設定だから込み上げさせてくれないと。

男2 よくわかんない言つてゐる事が。

男1 なんだ？

男2 とにかく、誠に申し訳ないのですが…。父親としてはせつかく娘に作つて貰つたもんだから、さっきの一件落着でもいいんじゃないかと思つたんだけど、やはりどうも、俺として納得がいかない

みたいだね。だからまあ、エピソードとしてはキレイかもしれないけど、まあ良くある話だからね、ちよつとそういう事じゃないんじゃないかと思つて、ええ。

女1、去る。

男1 幸子怒つちやつた。お父さんのせいですよ。せつかく作つたのに。

男2 いや美味しかったんだよ。だから先ほども申しているとおろ、本当に申し訳ないと思つておるので

すが、その場の雰囲気の流れで自分にウソを付くことは出来んですよこの俺の性格的に。

女2 じゃあおじいちゃんやんの食べたものつて一体なに？

男2 なんだろうねえ…。

男1 俺としてはお父さんのごはん屋さん徘徊がおさまつてくれたらそれでいいんだけど。

男2 美味しかったなあという記憶だけはあんだよね…。なんだつたっけかなあ。

男1 お前が納得してくれないともう探しようがないと思つよ？

男2 もやもやするよねえ。

男3 じゃあまた僕の口から言つてもいいですか？

男1 何を？

男3 僕は答えを知つてゐるんで。

男1 …は？

男3 はい。

男1 …なんで君が知ってるんだそんな事。

男3 可能性を探ると、もうそれしかないですから。

女2 え、なに？

男2 え、なに？

男3 でもそれは、今言っても実現しないと思います。

女2 どういう事？

男1 どういう事？

男2 え、どういう事？

男3 やろうと思ってる事じゃないですかね、

女2 なに言ってるのかわからない。

男2 うん。

男3 そつですよ。

男1 なんだよ？はつきり言ってみなさいよ。

男3 どうしようかなあ、やっぱり僕の口から言うよりも、みなさんが試行錯誤しながら答えを導き出す

方がいいかもしれないです。

男1 なんだ君は、じれったいな。

男3 その方が早いかもしいれません。

男2 豊田君と言ったかな。

男3 キヨシです。

男1 その豊田君で誰？

男2 知ってるなら教えてください、私にはもう、時間がないんです。

男3 おじいちゃんのせいじゃないんですよ。問題は家族です。

男2 家族？

男3 おばあちゃんがなくなってから、おじいちゃんずっと一人で食事してるんじゃないですか？

男2 …。

男3 家族みんなで食卓を囲んだり、してなかったと思うんですけど。

男2 …はい。

男3 僕が今ここで、家族みんなで食卓を囲んで食事をしてくださいって言うのは簡単ですよ。でも楽し

く食事出来ませんか？心から。言われた事をただ言われた通りにやっただけで事の本質は見えて来ないと思

いますけど。おじいちゃんは、何が食べたいとかじゃない、家族で食事をしたいんです。

男2 …うん。

女1、後つで黙って聞いている姿が浮かぶ。

男3 みなさんだつて本当はわかっているんじゃないんですか？ねえお父さん、

男1 はい…。

男3 会社が潰れたのと仕事が見つかからないのは全く関係ない事です。周りのせいにはばかりしていても

先には進めません。

男1 …はい。

男3 お母さんも、そんなお父さんの気持ちを解ってるならグチグチ言わない事です。やろうと思ってる

時に言われるとやりたくなくなるんですよ。子供と同じですから。

女1 …。

男3 晴美もダメだよ。今生きているのはお父さんとお母さんのおかげだという事を忘れちゃダメだ。人

は問題なく生きてる時は生きてる事に感謝しないものだ。だから君は今、問題なく普通に生きてる。い

つか君もお母さんになるんだからね。

女2 …。

男3 これつてすぐに劇的に変わるものではないかもしれない。一日一日の積み重ねが、家族の食卓を

作るのかもしれない。しかし心に距離ができてしまった家族でも、急速に近づく事が出来るのも家族

だと思えます。言うなれば、家族に心の距離など存在しないとも言えます。初めから、距離なんかない

のです。そうは思いませんかみなさん？

男1 …明日は七時に、ここに集合して、鍋でもしませんか？

女1 …。

男1 ああ、幸子は間に合わないのか、だつたら…

女1、出て来て、

女1 わかりました。

男1 …。

女1 おやすみなさい。

女1、去る。

女2 もう遅い時間だったんだ。

男3 そうみたいだね。

女2 じゃあ帰ろうか。

男3 いや、僕は今日からここに泊まる事にする。

男1 おい誰に許可を得たんだ。

女2 キヨシ君一人で？

男3 僕だけが泊ったら、朝起きて、お母さんが仕事に出かけた後、野郎が三人この家に居る事になる。

女2 そうか。

男3 だから、

女2と男3 おやすみなさい。

女2と男3、去る。

女2と男3、去る。

男2 なんかホント、申し訳ないですね…

男1 …何が？

男2 皆に気を遣わせちゃって…

男1、男2の近くに椅子を並べて、

男1 鍋は薬だよ、野菜を切るだけでいいから。ダシは市販のやつだから失敗しよつもないし、お父さん

と一人だとやる気も起ころなかつたけどみんな一緒だったからこれほど楽なものはない。

男2 申し訳ない。

男1 そればっかだな。

男2 味がしんなんて言わんときゃ良かった。

男1 実際これは聞いてないんだからいいんだよ、こつちが勝手に予想してるだけだから。

男2 ああ、そうか…

男1 でもなんとなくは判つてた事だと思つからさ俺も。お父さん一人で飯食べてる姿は客観的に見た

ら相当寂しいからね。

男2 …そうかもしれないね。うん、そういう事なのかもしれない。みんなで食べると美味しいって、ホ

ントそうでもないね。

男1 でもやっぱり幸子は七時に間に合わないみたいでさ、晴美も、どこ行っちゃったんだろう、帰つて

来ないし、

男2 そうか…

男1 どうする？先に食べる？

男2 もう少し待とうよ、どうせそんなにお腹空いてないし。

男1 そうだよね、おじさんが二人で鍋食べて何が楽しいんだって話だしね。

男2 今まで一緒に食べてなかつた家族が、急に集まるなんて恥ずかしいんじゃないか？晴美なんか特に。

男1 昨日の約束は結局果たされる事もありませんでした。家族揃つて食事をするって、今の時代相当難

しい事なんだ。それに挑戦する家族の話。これはそういうお話なんだ。

男2 じゃあみんなで鍋を食べれば終わるんだ。

男1 まあそうだろうね。

女1 たいいま。

女1、買い物袋を提げて帰ってくる。

女2と男3もそれに続いて。

女2 たいいま。

男3 たいいま。

男1 …おかえり。

男2 …おかえり。

女1 …なんだ、用意してたんだ、買って来たのに。

男1 …あ、ごめん、七時に間に合わないかと思つて先に用意しちゃった…。
女1 ありがとう。
男1 …あ、うん。

皆 食卓に腰かけようとするが、どこに座つていいか一瞬譲り合つたりする。

男1 あ…、ああ（立ち上がり、席を譲る）。

皆 食卓に腰かける。

照れ臭さそうな緊張感

男1 …じゃあ、あ、まず火をつけましょうか。

男1、火を付ける。

男1 …まあこの時間がね、なんとも言えない感じだけど、

男2 お前がそういう事言うからなんとも言えない感が出ちゃうんじゃないの？

男1 そっか。

沈黙

女2 お腹空いたー、もう食べていい？

男1 今火つけたばっかりだから。

女2 なに鍋したの？

男1 あ、豆乳鍋。

女2 とーにゆー？

男1 うん、女の人はみんな豆乳好きだつて試食販売のおばちゃんが言つてたから、

女2 へー。

男1 …うん。

女2 今日はお母さんと、寄せ鍋がいいんじゃないかって話してたんだよね？

女1 うん。

男1 ああ、そうだったんだ…、

女2 豆乳を、投入！

男1 …ハハ。

女2 豆乳を、購入！

男1 なんかがめんなさい。

女2 豆乳と、牛乳！

男1 …はい。

女2 牛乳も、購入！

男1 牛乳は買つてないんだけど、

女2 …。

男1 買つてくれば良かったかな。

女2 もう食べよー。

男1 だから、まだ煮えてないんじゃないかな、

女2 だつてもう間がもたないし、

女1 親子ですから。

男1 …じゃあもう食べようか、

女2 いただきますー。

男3 いただきます。

女1 いただきます。

男1 いただきます。

男2 いただきます。

間。

男1 おいしいねえ、あつたまるねえ、やっぱり鍋はいいねえ、

女2 お肉はなに？

男1 鶏肉がイイつて言つてたらしいから、おばちゃんが。

女2 へー。

男1 豚肉が良かった？

女2 豚をぶった、鳥を取りに行った、牛をうしなった。

男1 ……おお。

女2 アー、オイシー。

男1 ……おいしいね。

皆、無言で食べている。

男1 お父さん、どうかな？

男2 ……あ、うん、美味しいよ。

男1 ホント？！

男2 ……うん。

男1 良かったね、お父さん美味しいって！

女1 よかったですね。

男1 ……うん。

男3 お父さんちよつと箸置きましようか。

男1 はい。

男3 わかります？このよそよそしい感じ。

男1 はい、わかります。

男3 こういう事じゃないことはわかりますよね？

男1 はい。

男3 確かに一朝一夕には成らない事だと言いました。しかし、なぜ最初の日には豆乳鍋という変わり種をチョイスしたのですか？そのチョイスの仕方も売り場のおばちゃんに勧められたからという理由で、その主体性のなさが女性陣に嫌われる、頼りなく見られる原因だという事になぜ気づかないのですか。見てください、豆乳鍋は時間が経つとこうして鍋の周りにこびつくんです。野菜にもおぼろ豆腐状のものが付着して見栄えが悪い。豆乳鍋は短期決戦向きの鍋なんです。この日は最初の家族団らんですから長期決戦が予想される、それなのになぜ豆乳鍋か。にんじんの切り方にしてもそうです。なにをかつつけて紅葉型にしてるんですか？これはちゃんと型抜きをしないときれいな紅葉にはならないんです。

だからこんなにとげとげしたヒトデのような形になってしまふ。切り取ったニンジンはどうしたんですか？捨てたんですか？

男1 ……。

男3 捨てましたね。白菜の白い部分もあなただけこうバツサリ行ってますね。なるほど白い部分が嫌いということはおわかりました。ネギもいっちゃってますね。青い部分しか食べないんですね。確かに青い部分の方が栄養価が高いと言われています、太陽をしっかりと浴びてますから。しかしそれで土に埋まっている白い部分を食べないというのはいかがなものか。白い部分があつてこそ青い部分です。あなたは、目に見える成果しか信じない人間だ。そこに至る努力があつてこそ成果が見えるはずなのに努力の方は切つて捨てる。こうして食卓に運ばれてきた野菜もスーパーで売られるまでに農家の方々がどれほどの努力をしてきたか、あなたは想像したこともないでしょう。家の電気、これが今ついているのもスイッチを押したからついたんじゃないですよ、原発がある町から送られてくるんですよ。爆発しても、被害を受けない場所に居て、ただスイッチを押せばつくと思つている！あなたが総理大臣になったら、出来る人間だけ重宝して出来ない人間は切り捨てる、独裁者になるでしょう。まああなたが総理大臣に指名されることはまずあり得ませんが、加えて総理大臣に近づく事すらできないでしょう。総理大臣はあなたを見てもその辺に転がる石ころほども気を向けない。それはなぜか、あなたができない種類の人間だからです！あなたの言い分で行くと白菜やネギの白い部分です！あなたは、あなた自身を切り捨て、ゴミ箱に捨てている。そして！美味しい美味しいと青い部分だけを食べて満足している！青い部分が美味しくなかったら、この白菜はダメだと捨ててしまう。美味しくないと白菜があるから美味しい白菜を作ろうと努力する人がいる。演劇だつてそうです。たまたま今回が面白くないからと言って全部面白くないと思わないでいただきたい。面白くない回があるからこそ次が面白くなるんです。あなたが思つている以上に作り手ははるかに考え努力していますよ！その努力を、成果が現れない努力など意味がないなどと切り捨て、それがまた努力の過程であることもわからずにです。芸術において成果などありえないですからね！すべては過程であり、白菜という白い部分なんです。ザーっとどこまで行つても青い部分なんてないのが芸術ですから。青い部分を食べたいなと思つて努力したつて青い部分なんて出てきませんからね。もしかししたら青い部分くらい美味しいと感じる白い部分も出てくるかもしれない。しかし作り手にしたらそれはまた白い部分で、それを青い部分と思つたあなたはそれで満足して、また青い部分だと思つて食べたらそれはやっぱり白い部分で、青い部分と白い部分が交互に来てる。この白菜はとなるのかもしれないが、そもそも作り手は青い部分を作つうとはしてはいけないのかもしれない。青い部分を作つたらそこで終わりですからね。これが今出来る最上の部分だと思つて作つてい

るから、いつかあの青い部分を作ろう、なごとは思ってるはずがない、思ってたらずく作るはずですか。白い、それはどいまでも白い白菜、それが本当の白菜ではないのですか。そもそもどうして

男1 もつるさーい！

男1、テーブルをひっくり返して去る。

女1 こうして、一日目の家族の食卓は終わった。

「二日目」

男1、戻って来て、

男1 あの、まあそういう事があって、昨日は、ホントすいませんでした。：ちよつとやつぱりイラッとすると物にあたる癖があるって言うか、そういう人らしいので僕：もちろんそれは言い訳ではないのですが、

女2 恐いわ私。

男3 恐いね。

男1 ホントすいません。まあ、テーブルをひっくり返してみました、ちやぶ台じゃないので、ダイニングテーブルなので、ひっくり返すのはどうかと思ったので、なので今日からまた頑張りますので、よろしく願います。

女1 よろしく願います。

男1 …。

男2 なんか、悪いね。

男1 いやいや…。えー、今日は昨日幸子を買って来てくれた寄せ鍋の材料がありましたので、寄せ鍋にしてみました。二日続けて鍋というのもまた良くないかもしれないとも思ったのですが、お父さんと協議をした結果、まあいいんじゃないかという事になりましたので、白菜もネギもちゃんと白い部分も入れましたしええ…。いただきます。

他 いただきます。

男3 お父さんちよつと箸置きましようか。

男1 はい。

男3 お父さんこれ、自分で出汁とりましたね？

男1 あ、これはあの一応料理番見て、

男3 市販の奴買ってありましたよね？なぜ使わなかったのですか？

男1 市販の奴使うとまた薬をしたのなんだの言われると思ったので、

男3 あの市販の奴はお二人が選んだものです。

男1 ああ…

男3 それにこれは出汁の素入れてますよね？

男1 はい。

男3 だったらあなたが出汁をとった訳じゃないですよ？出汁をとるという事は、昆布、かつおぶしなどからとる事を言うんです。これでは市販の物を使った事と変わりがない。だったらお二人が選んだものを使つべきだ。だいたいあなたは気の遣い方を間違えている。気を遣つと言う事は

男1 もつるさーい！

男1、テーブルをひっくり返して去る。

「三日目」

男1、戻って来て、

男1 昨日は本当すいませんでした、二日も続けて失態を繰り返すとは僕もちよつと、どうかしていると
は思っていて、本当に反省しておりますので、今日は焼き魚にしてみました。

男2 申し訳ないね…

男1 いいから。えー、これもお父さんと昼間協議をした結果、アジの開きがいいんじゃないかという事
でいただきます。

男3 おや、これは魚焼きグリルで焼きました？

男1 はい。

男3 アジは身の方を上にして焼かないといけないんです。川のは皮から、海のは身から、これ
常識です。

男1 はい。

男3 あとグリルの中を予め温めておくといいですよ、空焼きと言って

男1 もつるさーい！

男1、テーブルをひっくり返して去る。

「四日目」

男1、戻って来て、

男1 誠に、なんとも言い訳のしようもないのですが、えー、僕もなんだかノイローゼ気味になって来ましてですね、最近夕食の時間になると胃が痛いしほんやりとして来まして

男2 あのお

男1 (手で制し) まあそういう訳で今日はお父さんと協議の結果、全く僕の手が入っていないほかはか弁当のハンバーグ弁当にしてみましたのでいただきます。

男3 まずハンバーグというのは

男1 もつるさーい！

男1、テーブルをひっくり返して去る。

女2、去る。

「五日目」

男1、戻って来て、

男1 あのですね、なんだか条件反射のようになってしまっておりますが、

男3 今日は水の話しましょう。

男1 うるさーい！

男1、テーブルをひっくり返して去る。

女1、去る。

「六日目」

男1、戻って来て、

男1 もつさ、君帰ってくれないか？ここは家族の食卓なんだから、君は家族じゃないんだからさ、

男3 嫌だな、僕は晴美のボディガードなんですよ？

男1 君が余計な事さえないわなきや僕がテーブルをひっくり返す事もないし、もつこの三人しか食卓にいないじゃないか。

男3 いいですか、僕はあなたの為を思ってる

男1 もつるさーい！

男1、テーブルをひっくり返して去る。

男3、去る。

「七日目」

男1、戻って来て、

男1 …結局、また二人に戻っちゃいましたね。

男2 …うん。

男1 すいませんでした。家族の食卓を台無しにしてしまいました、一緒に食べようって言ったのは俺なのに、

男2 いや、気持ちちはね、すごく伝わってますよ。みんな一生懸命家族の食卓を作ろうと思っててくれたなって、すごく感じますね。だって誰も悪くないし、幸子もあれ、仕事早く上がってくれたんじゃないのか？毎日七時に帰って来るなんて相当無理しとったんじゃないのかな。

男1 …たぶん。

男2 晴美も、おじいちゃんの為に毎晩家族で食卓を囲むなんて、バカらしいと思ってるかもしれないけど、それでも毎日来てくれとったもんね。

男1 …はい。

男2 あのキヨシ君も、本当に悪気はないと思うよ。彼は本気でお前の事を思ってるんだと思う。だって彼が居なかつたら家族で食卓を囲もつなんてならなかつた訳だしさ。

男1 …そうですね。

男2 豊田君も、ホントありがとう。すごく感謝してますよ私は。

男1 …僕だけ名前が違っんですけどね。

男2 ありがとう。みんなが俺の為にさ、そこまで気を遣ってくれてるなんて知らなかつたし、やっぱり家族って優しいなあと思ってる。

男1 …いや、本当すみません。…いや俺がもうちょっと素直になればね、上手く行くんだと思うんです

よ、わかってただけじゃあ…、

男2 そんな無理しないで、

男1 俺がね大人になれば、なりさえすればいいんですよ。だから、だから明日からまた、頑張りますから、

男2 そんな…、

男1 毎日七時に二飯作って待ってたらさ、また皆帰って来てくれるかもしれないし、幸子に料理習わうかな、今晩話しかけてみよう…。

男2 うん…、

男1 俺親父が早くに死んじゃったからさ、あんまり話した事ないんだよね。俺が大学生の時だから、一

番家に寄り付かなくなってた時。

男2 そうなんだ。

男1 だから長生きしてくれないと。

男2 ありがとう。本当ありがとうね。

男1 今日は何を食べようね？二人だから簡単に済ませますか？

男2 でもね、本当にそこまですれちゃうと、また変なプレッシャー感じちゃうから。

男1 いやいや、

男2 こうしてさ、家族揃って二飯は食べられなかったけどさ、楽しい食卓は囲めなかったけど、もし上手く行つてさ、楽しく食事が出来たとしてもさ、どれも違うと思うからさ。

男1 …？

男2 やっぱ俺が食べたかったものとは違うみたいなんだよね。

男1 …え？

男2 それをね、結構早い段階で、二日目くらいには気付いてはいたんだけど、みんなに申し訳なくてね、言い出せなかったんだ。そういうね、シチュエーションとかそういう事じゃなくてね、あるんですよ、もう、あの、味がね、ちゃんとあるんですよココ(舌)に。あのね、実はココまで出かかっているんですよ、なんだったのか、頭文字さえ判ればね、出るような気がしてるんですけどね…、あの、なんだっけ(両手を使い) こうやって「はむっ」て食べる、こうやって「はむっ」って、なんて言ったっけ？

男1 …サンドウィッチ？

男2 そう！モスバーガー！

男1 …。

男2 そうだ、モスチーズバーガー！あれが食べたかったんだ！うん、あれ美味しい！まだ一回しか食べ

た事ないけどあれが一番食べたい！あれ美味しかったなあ！

男1 …じゃあ買つて来いよお金渡すから。

男2 ホント？！一万円も？

男1 …もう好きなだけ買つて来いバカ、

男2 うん！

男2、嬉々として去る。

男1 …あいつ、まあかん。

外は雪。

男2、モスバーガーの紙袋を抱えて帰って来た。

男2 うー、さぶいさぶい、雪降ってきたよ豊田君！

男1 …全部使ったの？

男2 うん、好きなだけ買つてイイって言わなかったっけ？

男1 …随分しっかりしてきたな。ボケはどこ行っちゃったんだ？

男2 さあ食べよう食べよう、いやあ、ひっさしぶりー！

男1 こんなに食べられる訳ないだろう、おじさん二人で。

女1、帰って来た。

女1 たいいま。

男1 …お帰り。

女1、椅子に座る。

女1 今日は何にしたんです？

男1 …あ、今日はね、

男2 モスチーズバーガー！ほら食べよう！

男1 お父さんね、これが食べたかったんだって。

女1 …え？

男1 ずっと食べたかったの、コレだったんだって。

女1 (笑って) 最近の食べ物だったのね。

男1 うん、心配して損した。

男2 さあ食べようよ、もう食べよう！待ちきれないぜ！

男1 うん、わかったよ、

女2、帰って来た。

女2 たいだいま。

女1 お帰りなさい。

男1 …お帰り。…あれ？あいつは？

女2 居ますよ。

男1 居るんだ。

男3、やってくるよ、口にはマスク。

男3 …。(ペコリ)。

女2 今日はキヨシ君に一言も喋らせないから、お父さんテーブルひっくり返さなくて大丈夫よ。

男1 …。

男2 ちょっと！もう食べますよ！なにやってんのダラダラ。もう冷めちゃう！雪降ってたからさ！早くしようよ！

男1 …今日はね、お父さんの食べたかった物がついに判明したんです。それがこれでした。モスチーズバーガー。なので今日の晩飯は、これを食べる事にします。では、いただきます。

男2 いただきますー！

女1 いただきます。

女2 いただきます。

男3 …。

男1 いただきます。

皆、モスチーズバーガーを食べて、微笑む。

男1 美味しいね。

女1 久しぶりに食べました私。

男1 俺も。

女2 おいしい。

男3 …おいしいです。

男2、目をつぶり感慨深げに食べている。

男1 こういう日こそ、鍋にしたかったね。

女1 そうですね。

女2 豆乳鍋、また食べたい。

男1 あ、そうだね、明日はそうしようか。

女1 明日は私、休みにしようかしら。

男1 え？

女1 あの、ずっと有給使ってなかったから久しぶりに温泉でも行きませんか？

女2 え？！

女1 みんなで。

女2 行く！温泉！

男3 温泉はこの辺りだと、

女2 キヨシ君。

男3 はい。

男1 なに詳しいの？

男3 はい、僕温泉には詳しいです。

男1 じゃあキヨシ君にいくつか候補出して貰おうよ。

男3 いいですよ。

女2 温泉♪温泉♪

男2 あの、ちよつといいかな。

男1 …はい。

男2 …やっぱりね、これじゃなかったみたいなんだわ。

男1 じゃあ明日の場所を決めて、もう準備しましょう。

男2を残して去っていく。

男1 え、家族でどっか行くなんていつ振り？

女1 …え、もう、えー？

女2 私記憶ないよ。

男1 えー、ホント？

女1 確か、高山とか行ったんじゃない？

男1 え、いつ？

男3 片道どれくらいで考えます？

男1 車で、

女1 二時間くらい？

なごと話している中、

男2 …なんだったっけなあ、どんな味だったかなあ…、うーん、美味しかったなあという記憶だけはあ
るんだけどなあ…、なんだったかなあ…。

皆 出て来て、一礼して去る。

〜終〜

【上演記録】

2015年11月6日～8日 名古屋公演・愛知県芸術劇場小ホール

12月4日～6日 東京公演・シアター風姿花伝

作・演出／平塚直隆 照明／今津知也 作曲／いちろー 音響／田内康介 舞台監督／柴田頼克

この戯曲の著作権は、作者である平塚直隆にのみ帰属するものです。
上演許可あるいはその他のお問い合わせは、作者の所属する「オイスターズ」へどうぞ。

■ オイスターズ ■

ホームページ

<https://oysters.official.jp>

メールアドレス

theatrical_unit_oysters@yahoo.co.jp